6.石けんについて

香料や殺菌剤を含まない普通の石けん

4. パンフレット作成にあたり、患者の意識調査を行なわなかったため患者のニードの所在が明確にされなかった。

考察

私たち看護婦は、毎日同じ事を何度も繰り返して、個々の患者に説明するので、患者指導の慣れや、外来診察の流れにより自然と早口になったりする。一方、患者は診察の緊張や不安の為、医師や看護婦の説明についてよく理解していない様子も伺える。皮膚科看護で、軟膏処置は、看護婦の役割が大きく、その手技、熟練度によって治療効果が大きく影響されるため、今回のパンフレットを作成した事は、患者サイドばかりではなく、私たち看護婦にとっても意義あるものとなった。

おわりに

今回は、ペンフレット作成だけにとどまったが、今後このパンフレットを試用し、患者との会話の機会をより多くもつことによって、より効果のある個々の患者に適した指導ができるようにしていきたい。

第４群発表

4～5　初めての児をもつ母親への指導を考え

小児科外来　○吉田恵子　金野いづみ　草野弘子
相本千代子　久保明美　日極繁野

はじめに

近年、社会的情勢の変化に伴い、人口の高齢化が進み、その一方では、都市化や、核家族化も徐々に増加の傾向にあります。女性の社会的進出などという現象も、新聞やテレビなどで、ずいぶん報道されるようになってまいりました。これらの現象を特に家族構成の変化という側面から見ると、家庭に於ける育児は、今や育児経験の少ない母親のみの判断によるところが大だと考えられます。当科外来に於ても、日頃からの診療介助などを通して、感じることは、医療者側が、患児について、母親に家庭での育児や看護法などを指導する時に、相方に意識の差がかなりあるということです。ほんの一例ですが、５ケ月の乳児で、下痢を主訴に来院し、外来では、食事療法の指導を行い、ミルクの濃度をうすめ次回来院を指示しましたが、次回来院時、治療の成果が上らない為、再度聞き正したところ、離乳食は、朝昼２回、普段と変わりなく与えていたというのです。我々の反省をも促したケースですが、特に初めての児をもつ母親に対して、今後の外来看護の課題となる問題を含んでおり、このテーマに対して、アンケートをとりながら、取りくんでみました。

研究方法

対象：初めての児をもつ母親で、児の対象は０～２才児迄とした。又、当科外来を受診するのが初めての児と限定した。

調査期間：昭和60年10月21日～11月２日迄

方法：当科外来で準備した、アンケート用紙(1)(2)により予診前に(1)を、診察終了後に(2)を母親自身に筆記してもらいました。

結果

アンケート(1)

1. お宅ではどのような症状がみられましたか。ご自分で気付かれた点を記入して下さい。（　　）
2. いくつか症状がある場合、何が一番御心配でしょうか。（　　）
3. 病院を受診するのにあたり、どなたかに御相談されましたか。（はい、いいえ）
   (1)はいとされた方は、どなたに（　　）
   (2)いいえとされた方、何か育児書や家庭看護の本など読まれましたか。（はい、いいえ）
4. 現在は夫婦と子供の他に同居している方はあります

か。（ある、ない）
ある方はどなたと----（　　）
5. 本院を受診された理由は？
（　　）
6. 受診の際に診察時間は気になりましたか。
（はい、いいえ）。具体的に（　　）

アンケート(2)
1. 診察をおえて、何かその後も心配や不安な点が残っていますか。
(1)残っている。(2)解決した。
(2)どんな点をもう一度きいてみたいと思われますか。
（　　）
2. 診察前に医師に話そうと思っていたことは、全部話せましたか。（はい、いいえ）
3. 看護婦に診察後に何かたずねてみたいことはありました。（はい、いいえ）
具体的には（　　）
4. その他、何かお気付きの点がありましたら、どうぞご記入下さい。
（　　）

結果　アンケート(1)より
質問1.に対しての回答
○顔に湿疹が出ている。
○発熱はない。
○風呂の後、腹部一面に赤いブツブツが広がった。
○口の周りのカサカサ、ブツブツ。
○便秘気味で時々ミルクを吐く。（便秘は2日に1回）
○湿疹が生後1ケ月頃から出て、国立某病院でアトピー性皮膚炎と診断され、それ以来、かゆがって眠りが浅い。
○顔全体に湿疹ができていて、アレルギー体質かどうか、心配である。又、そのためか一日中ぐずる。
○ミルクを吐くことが多い。
などの回答を得ました。（回答の表現は、母親が記録したことを、そのまま列記しました。）
質問2に対しての回答
○アレルギー、アトピーの有無について。
○湿疹が特に気になる。
○顔面の湿疹が特に気になる。
○現在5ケ月半で歯も出てきたが、現在は10倍がゆとじゃがいも、かぼちゃを与えているが、これから、どうしたらよいのか、食べていけないものはないかなどの回答がありました。
質問3に対しての回答
○「はい」と回答した母親　5名…(62.5%)
○「いいえ」と回答した母親　3名…(37.5%)
(1)「はい」とされた方は、どなたという質問に対して
○主婦の友育児センターの助産婦
○出産した病院（国立某病院）の助産婦
○アトピーの会※の会員の人達
※（当科外来の特殊外来にアレルギー外来があり、アレルギーの子をもつ親の会と称する任意の会がある。）
(2)「いいえ」とされた方は、何か育児書や家庭看護の本などを、心配で読んだことはありますかという質問に対して
○「ある」と回答した母親　5名…(62.5%)
○「ない」と回答した母親　3名…(37.5%)
という結果を得ました。
質問4に対して
○同居している　○回答0……（0%）
○同居していない　○回答8例…（100%）
ただし産後の為、現在実家に両親と共にいるという回答が1例ありました。
質問5に対して
○本院産科で出産したため、安心だから
○近くて大きな総合病院だから
○アトピーやアレルギーの専門外来が有ると教えてもらったから（桶谷式母乳マッサージの助産婦）
○アトピーの会員の人達に推選されたから
などの回答を得ました。
質問6に対して
○「はい」と回答した母親　2例……（25%）
○「いいえ」と回答した母親　6例……（75%）
「はい」と答えた方は具体的に御記入下さいという項目についてみてみると
○待ち時間が長いという、2例の回答がありました。
以上がアンケート(1)についての回答でした。次に、アンケート(2)より
質問1に対して
○心配や不安が残っている…2例…（25%）
○解決した　…5例…（62.5%）
○無回答　…1例…（12.5%）
心配や不安が残っていると回答した母親にどんな点がもう一度きいてみたいかという質問に対して
○食事のあげ方、病気の長期的な見通しと答えたのが1例ありました。
質問2に対して

「はい」と回答した母親　5例（62.5％）
「いいえ」と回答した母親　2例（25％）
無回答　1例（12.5％）

質問3に対して

「はい」と回答した母親　3例（37.5％）
「いいえ」と回答した母親　4例（50％）
無回答　1例（12.5％）

○「はい」と答えた方は、具体的にどのようなことがあるのか、という質問に対して
○一日中ぐずぐず泣いているということは、どんな原因があるのか。
○来週ツベルクリン注射とＢＣＧ接種があるが受けてよいかどうか。

などの回答がありました。

質問4に対して

○とにかく疲れた
○時間がかかった。（診察の手続き、待ち時間含めて）

という自由記載がありました。

考察

アンケート(1)より、質問1に対して

湿疹が心配だとする母親の訴えが多くなっている傾向が、当科外来でも認められ、特殊外来に通う患者が次第に増加してきているようです。家族的にアレルギーの傾向にあるというだけでなく、小児をとり囲む、外的環境の変化、たとえばコンクリート造りの住居、大気汚染、などにも目を向け、どのような環境の中で、毎日をすごすのか等、私達自身がもっと問題意識をもって、きき正していくのかを、警告しているようです。

母親自身が初めての為に過大に表現して、やや心配しすぎている状態もみられ、かくされた病気があるのか、不安におされてしまっているのか、よく観察していく必要を再度認識させられました。又、今回、回答者の大半がアレルギーの精査などを希望して来院された例が多い為質問の回答に対して、片よりがあったことが、認められます。

質問2に対して

対象が0～2才児迄の為、母親も特に発育の基礎となる栄養の面に関する心配や、湿疹がそのまま、喘息や、アトピー性皮膚炎などと、移行していくのかどうかなどについて心配している様子が伺われるように思われます。

質問3に対して

(1)「はい」と答えた母親はやはり予想よりも高く、再診の患児やもっと年長の児をもつ母親よりも、一度どなたかに相談してからという値がでており、受診すべきかどうかなど、判断にまよっていたことが、うかがわれます。又、相談相手としては、やはり身近な、出産時に世話をしてもらった助産婦をあげた例が多かったのも、今後、当院の産院との連絡の方法などに、何か又よい方法などがないかどうかを、示唆してくれたものと思われます。又アトピーの児を持つ親の会というのがあり、これは、本院外来の患者の親が中心となっている会で、そこを通して地域とのかかわりも少しずつ、広がりをみせていることが、明らかになりました。

(2)「育児書や、家庭看護などの本も、最近は書店などで、手軽に求めることができ、どこの家庭にも、ずいぶん浸透していると思われます。具体的な本のタイトルなどは、たずねなかったので、どのようなものが、手元におかれているのかは、明確ではありません。しかし、現在のように、核家族化がすすみ、隣近所の方との接触がうすれてきている現在、このような本に頼る傾向も、少しずつ増加してきているようです。

質問4に対して

私達が、当初予想していた以上に、今回の回答者の結果では、核家族が百パーセントでした。

これは、やはり、子供を育てていく中で、いろいろな難題にぶつかった時、特に病気に対して、どのように対処してゆくか、という時に、大いに悩んだり、不安に思ったりすることにならないか…と感じさせられました。

質問5に対して

これは、新宿という交通の便の良さや、総合科をもつ大学病院であること、又、アレルギーの専門外来があること、ここで出産したからという、安心感などが、結果としてえられ、今後もますます、これらの回答に恥じないような、洗練された技術や、信頼される日々の対応の仕方などを、印象づけられました。

「はい」と回答した母親に具体的に、その内容をきいてみると、とにかく診察迄の待ち時間が長いというのがありました。これは、事務手続きから、予診、診察、投薬があれば、又そこで待つという、慢性的な外来の悩みでもあります。その中で、いかに有効に時間を費やしたり、待ち時間を短縮するか、ということは、今後の新病院とも、大きくかかわってくる問題と思います。

「いいえ」と回答した母親は、他のお母さん方と、育児上の問題などを話していて、ためになったなどという答えをした例もあり、75パーセントと、高率を示しました。

アンケート(2)より

質問1に対して

(1)ほとんどといって良いのか、解決したとするものが多かったのですが、まだ心配をするものも、2例ありました。病気に対して、自宅に戻ってすぐに、気になってくるのが、食事の与え方などです。外来においては、各々の患児に必要な、栄養、休養、保清などについては、説明をしていますが、きいてもきいても、まだゆっくりと、一つ一つについて回答を得たい、というのが、母親の、いつわらざる心境だと思います。

(2)もう一度きいてみたい点についての回答は、わずかに1例でしたが、食事の与え方、病気の長期的な見通しなどが書かれており、診察時に、まだまだ充分には、母親は細かいことを、きいてみたいものなんだということや私たちがもっと細かい説明を要求されているようにも受けとめました。

質問2に対して、医師に話そうと思っていたことが話せた人は62.5パーセント。4人に1人は、自分で思っていたことは、充分に話せなかったとしています。初診であり、診察の雰囲気になじめなかったり、何をきいたらよいのか、意見がその場では、出せなかったということがその中に含まれていると感じました。

質問3に対して

看護婦に具体的な援助として、どのようなことを要望しているのかを、みてみたいということで、その結果がどうなるか、興味の多い項目でしたが、37.5パーセントの母親が、私達に何らかの質問をもって回答してくれました。やはり内容的にも、身近なテーマが多かったように思われました。

質問4に対して

とにかく疲れた…という回答は、予測していたことでした。初診の際は、病院内にもどういう手続きをして、どのように実際の診察に入るのか、何をきかれ、どう答えれば、よいのだろうか、会計は、薬はどのようにしてもらうのだろう…と何から何迄もが、緊張の連続です。まして、疾病をもつ子供と、大きな荷物…私達も毎日、外来を受診する親子に対して、大変だなという感じを抱いているのですが、せめても、待ち時間の短縮ということなどについては、診察の流れ、患者の待ち時間の有効な活用などについて、再度考えていかなければならないものと思います。

おわりに

今回、外来でこのアンケート調査をとり、具体的に個人個人にまで、手渡せるようなパンフレットなどを作ることも、着手し成果をみたかったのですが、そこ迄は至りませんでした。でも、この数例のアンケート調査の中には、日頃より、私達が気にかけている、外来看護の姿や地域との関連性、医療従事者と、患者および家族の信頼関係、待ち時間短縮など様々な課題を与えてくれたように思いました。

2週間という期間の中にすれば、8例というアンケートは少なすぎたように思われますし、今回の調査の結果を全面的に過信してはならないと思いますが、更にすすんでいくと思われる核家族化の波や、子供の数の問題、新宿という地域に、私達は、病院の外来の一端をになう者として、今後とも、膝をわって会話のできる、明るい、雰囲気の外来を目指して、努力してゆきたいと考えます。

参考文献

1. 新乳幼児保健指針　母子愛育会編
2. 小小児科書　松村忠樹著
3. 小児保健　今村栄一・巷野悟郎編著
4. プライマリ　ケアとは何か　ジョン　フライ著(医学書院)
5. レポート　論文のまとめ方と書き方　宮内克男編著